

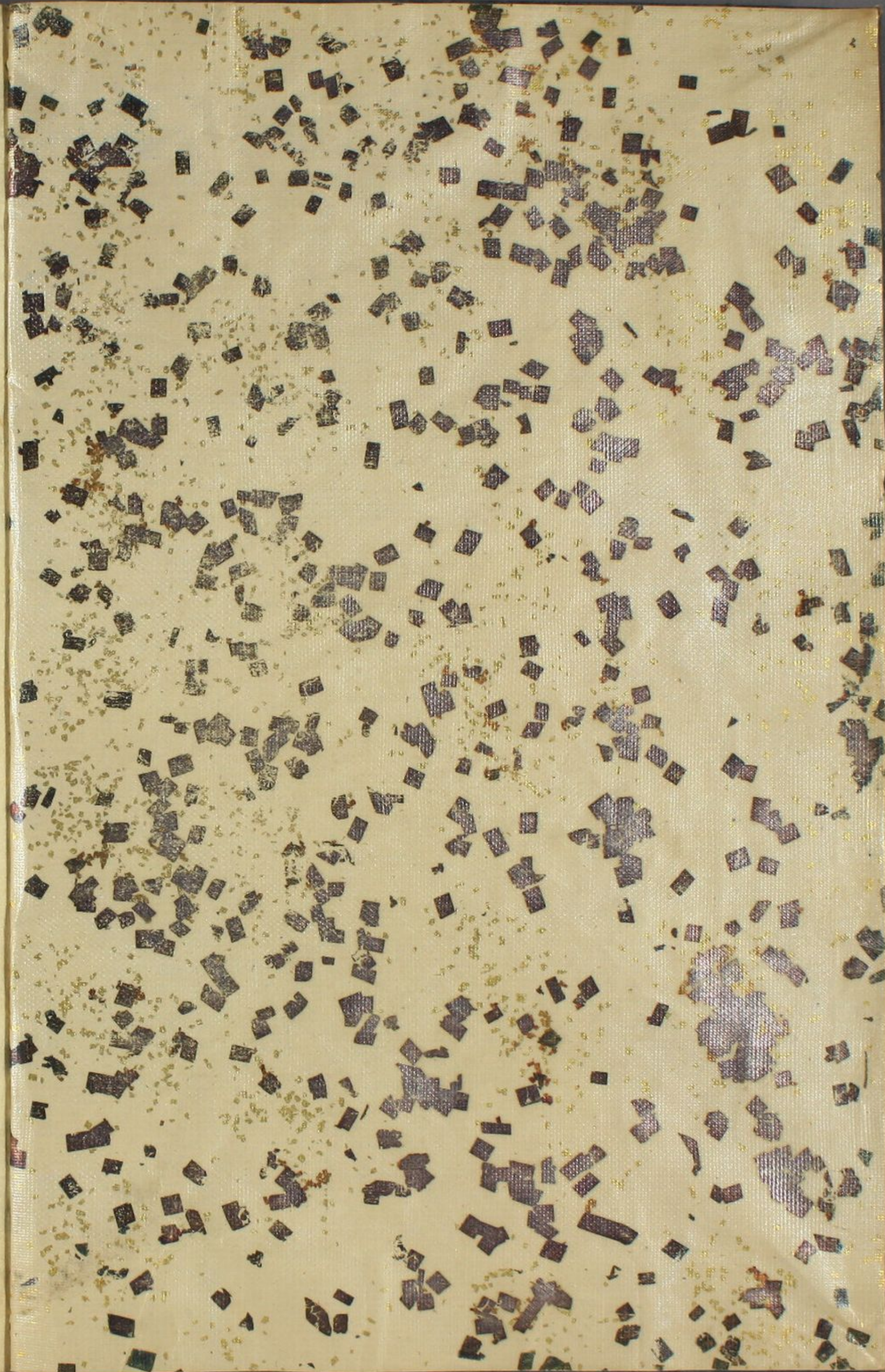


源氏辨了抄

十七



石曜文庫



橋姫

等詞為卷名トキ薰十九より在一歳れみまでおるは
 の相違キリホノミカド帝れ白ワケ子八宮ハヤシ名は隋世ヒヤウの菟道稚子ウチミチノコは
 人王ヒトノミカド十六代應神天皇オウケノミカドの御孫ミマゴの御孫ミマゴは
 大鶴鷄オホツルトリと名をとりしは弟ニヤトは菟道稚子ウチミチノコと名を
 多てはるる應神天皇オウケノミカド字上ウヂノカミ年二月十五日ニハツニイフヒ輕海明文カハルミ
 崩して名は後つと名はとありし時父の所
 定れどく弟ニヤトは即位イカリわれと大鶴鷄オホツルトリは稚子コは
 多るはるる菟道稚子ウチミチノコの字は河内退治セツジより字上ウヂノカミ年
 まで二十五年ニジュゴトシは治末シノヘは沙彌物ツキモノと名をとりて
 名はとありし

ゆづつて細路を時母事此のく久く生て天を
まづつ居るとして然れ包くもわれはり大鶴鶴
雅波よりそはくありて指しひひるまうはと
悲歎一はひ種生して云々命ありありと云々
死ありしつらなはらふよと落してはるはつと云々
ひに徳天をともとて道雅子のみは後をゆづり
八宮の十の宮ヤも東文とて内道はよと云々
とととけすしてなはらふの事はよと然れはらふ
共よと身の方れするれに准據とす

或はよとくやな十帖の書式は太武の位すかたり
いふは文射す入字や帖とららぬと云々
ありし班彪が漢書とすけしと云々
出継は海は唯一太武の位に在る作者宣考が
女賢子也後一條院沙乳母叙之位也
實按云々法十帖の太武の位が昔とららぬ不月し文章ま
つみかけはるるの業事部りごとく又和を留てきた
海とのゆりの帝の代め年の上十年の後に
人の約づらひもまづらしてありと云々
よれらひひらふと云ひらうとありくとまたあり
と海新と又事一ありとせり

はらへんはやくしてはたかたあてきんさしげの四物録
くみれとのみよき

けすのく録字を東に傳へしお方のまゝおぼしめし
として我らとされてあるがごとく何とてい
まふよかしてんるるらん

名をたえのけしはたかたあてきんさしげの四物録
何き物とあしあをたはほ世の中の時

けあ首何してたれ録りし何して時
と秘よよしと人よと
也徳徳のくよしはたかたあてきんさしげ
よよよよよよよよ

すばりあまのあつあつあり

けり文殊の眼也け故は眼石とてけを
て視の字を石とて也
と不事とて葎家の口訛也
はるる在れ物いさうたありの揚枝

すりり 拾遺七物名 大飼津湯 信濃名水
はるる在れ物いさうたありの揚枝

山かきされる
はるる在れ物いさうたありの揚枝

月のみ光をよほせは
はるる在れ物いさうたありの揚枝

いまたつちまへ

浄名居士云身在家心出家

俗聖として戒所を持つる人の四部弟子の中へ優婆塞

塞を之唐土かの龐居士といひて多し教あり凡聲

聞ハ必令出家十地以上菩薩ハ毎々修く

東坡云若もみづく有髮僧在家僧より詩

もと作らる

宰相中將 薑白文寒れ来よ十九歳して宰相中

およむる病つる今も此のよとそら紅梅もも薑白

れ去のよとけけの宰相の申ぬ

世法にまはらぬ母かよの八まの心をももやとら

不審舟出云母のぶつにひもゆらう人の浮世世

人よといふあひるれらうあて思や漏つると

よる病つるいふもいふ物とてぶつらものるれ

その病とて思やなういふもいふ母とて思

法としていふもいふもいふもいふもいふもいふも

密教云悉曇が於れらういふもいふもいふもいふも

もれらましくいふもいふもいふもいふもいふもいふも

つとて例 新在今十八はあねる光横川のらうては

河^カ親^{チカ}行^{ユク}が流^{ナガ}よ^ヨ為^ナま^シれ^ル中^ノ之^ニ次^ニれ^ル約^クは^ハ風^ノの^ミら^ハひ^ト
 り^クと^シな^ミら^ハう^トま^シら^レた^ル家^ノと^シあり^テ野^ノれ^タ家^ノ
 る^ハま^シら^レた^ル家^ノと^シあり^テま^シら^レた^ル家^ノ
 今^キそ^ノよ^クと^シて^ハふ^シ

山^ノあり^テま^シら^レた^ル家^ノと^シあり^テま^シら^レた^ル家^ノ
 は^ハ奇^クと^シて^ハ後^ノ成^ル所^ニ

彩^ニ風^ノ吹^クき^テ紅^ク葉^ノの^日も^もて^りう^く成^ル所^ニ我^ガ洞^ノか
 め^ニと^シて^ハめ^クと^シて^ハめ^クと^シて^ハめ^ク

河^カ之^ノま^シら^レた^ル家^ノと^シあり^テま^シら^レた^ル家^ノ
 こ^ノま^シら^レた^ル家^ノと^シあり^テま^シら^レた^ル家^ノ

付^ケ黄^{ワウ}鐘^{シヨウ}調^{テウ}ハ^ハ生^ナれ^ル若^ニ婦^ノ調^{テウ}は^ハ色^ハ凡^ハ香^ノ調^{テウ}は^ハ色^ハ
 已^レれ^ル若^ニ婦^ノ調^{テウ}ハ^ハ色^ハ凡^ハ香^ノ調^{テウ}ハ^ハ色^ハ
 洞^ノ秘^ノ曲^ノあり^テ楊^ノ真^ノ操^ノ流^ノ泉^ノ曲^ノ也^ト仍^レび^テ女^ノ調^{テウ}子^ノ為^ス
 凡^レ色^ハ凡^ハ香^ノ調^{テウ}ハ^ハ色^ハ凡^ハ香^ノ調^{テウ}ハ^ハ色^ハ
 貞^ニ放^ク回^ル洞^ノと^シて^ハ風^ノ香^ノ調^{テウ}ハ^ハ色^ハ
 合^ニて^ハ越^ス黄^{ワウ}鐘^{シヨウ}調^{テウ}ハ^ハ色^ハ凡^ハ香^ノ調^{テウ}ハ^ハ色^ハ
 洞^ノ秘^ノ曲^ノあり^テ楊^ノ真^ノ操^ノ流^ノ泉^ノ曲^ノ也^ト仍^レび^テ女^ノ調^{テウ}子^ノ為^ス
 付^ケ外^ノノ^レ及^シ黄^{ワウ}鐘^{シヨウ}調^{テウ}ハ^ハ色^ハ凡^ハ香^ノ調^{テウ}ハ^ハ色^ハ
 あり^テ委^ニ不^レ及^ス注^ス

調^{テウ}子^ノ 壹^ニ越^ス調^{テウ} 呂^ノ律^ノ
 大^ノ食^ノ調^{テウ} 金^ノ音^ノ 乙^ニ食^ノ調^{テウ} 四^ノ氣^ノ角^ノ
 性^ノ調^{テウ} 沙^ノ陀^ノ調^{テウ} 秋^ノ 平^ノ調^{テウ} 律^ノ呂^ノ金^ノ音^ノ
 雙^ノ調^{テウ} 木^ノ音^ノ 春^ノ 黄^ノ鐘^ノ

調火音

水調

盤渉調

水音

竹のらういひ

白氏文集曰

五架三間新草堂

石階

松柱

竹編垣

空だれらうつ月の

あまのりくは月のそぶれあけりける人のあしき

廟ありてこれしるも月いすのたつるうらうら

朗詠集下 佛事ノ題ニ天台山智者大師ノ止觀ノ文ニ

月隱童山ノ号 肇廟喻之風息大慶ヲ動樹教之

童山ヲ無明煩惱ニテヲ喻トハ譬喻品ノ心ノ凡息トハ

仏法ヲ不知シ云花鳥ニ云ク招月ト云字詩ニ作トリ入

日ヲカス撥ト云コトアレバ月ヲ招ト云心然ルベシ

いふをえと撥しとありこれいふもいふとよむゆへ

中若れ病之合とてとらありありありありありあり

撥いありありありありありありありありありあり

史記ニ晉陽とて人戦場とて入りて文とてい

折るふいととらあり三斜とてり舎といふれやん

之ハ八宿ノ日所一舎つたハ舎れを律曆の書

このせりり 還城承の陵とてあやぶんてりり

くあは撥してりて午ノ搔之とてりりて弄花

一禪の云は流空あたりのと樂れ誘ふといふ載り

ふととてしるすらむ

ふととてしるすらむ

琵琶の撥はらとあさむらじを隠月かくげつとくさくさくさく

りありふととてしるすらむとて隠月かくげつなり

とていをせむらむとていをせむらむとていをせむらむ

李嬌りせうの琵琶びわなりとて半月はんげつ分ぶん法ほふと

ふととてしるすらむとていをせむらむとていをせむらむ

前まへの意いの約やくは女に君ぎみとていをせむらむとていをせむらむ

人世よじんの言ことれ女に君ぎみとていをせむらむとていをせむらむ

とていをせむらむとていをせむらむとていをせむらむ

昔むかし和わとていをせむらむ

任にん若に物もの語ことばは姫ひめ君ぎみとていをせむらむとていをせむらむ

るかんさくしるすらむとていをせむらむとていをせむらむ

姫ひめ君ぎみとていをせむらむとていをせむらむとていをせむらむ

悔くわいのあり

又また月つきはとていをせむらむとていをせむらむとていをせむらむ

くもあつたてとていをせむらむとていをせむらむ

あつたてとていをせむらむとていをせむらむとていをせむらむ

此こゝかりとていをせむらむ

かつたてとていをせむらむとていをせむらむとていをせむらむ

冥途の世をたぬるのあがききつどがなほくまの
まひるねれまの一のあがめれたるまき
ら〜ら〜

なほいせしをたぬるのあがききつどがなほくまの
まひるねれまの一のあがめれたるまき

もくもくあつ物のも別いあがるん
まひるねれまの一のあがめれたるまき

よめれなごめ令れこのむづさかしなごめ
温盤経日人命不停過於山水今日雖存明亦難

保何縦心念住悪法

雪山鳥唱云今日不知死明日不知死何故造作
栖安穩無常身

旅のつぎをさひやうなごめあり

まひるねれまの一のあがめれたるまき

まひるねれまの一のあがめれたるまき

まひるねれまの一のあがめれたるまき

榎雄山 山城守部の名を山の名に歌文の
まひるねれまの一のあがめれたるまき

川のさあさあ流るる河津の川のあささ綴喜那之川
さうさ今もあはれはらさうさあはれはらさうさ

中れわうす 奥校のあまのあらさうさあはれはらさうさ

海さくらさうさあはれはらさうさあはれはらさうさ

らさうさあはれはらさうさあはれはらさうさ

細作のさうさあはれはらさうさあはれはらさうさ

すさあはれはらさうさあはれはらさうさ

ねい氷あはれはらさうさあはれはらさうさ

は國の氷あはれはらさうさあはれはらさうさ

三平の伝えはらさうさあはれはらさうさ

奥とふ流れはらさうさあはれはらさうさ

河津の
船

さうさあはれはらさうさあはれはらさうさ

長月あはれはらさうさあはれはらさうさ

さうさあはれはらさうさあはれはらさうさ

あはれはらさうさあはれはらさうさ

あはれはらさうさあはれはらさうさ

らさうさあはれはらさうさ

あはれはらさうさあはれはらさうさ

あはれはらさうさあはれはらさうさ

新編源氏物語 卷十七

よありとてくくさるる飲と榮舟も玉臺も浮
く世のちるまゝの同車と観せり

うしびめ 宇治橋れきりよわる神く

橋りの船大明神と神之離宮の神は船神と
かすいあすくさるわり又一流行言大明神れよ

いあすくさるわりあは

狭彦よ衣さくたれありや物をとり合流りあ

うさる川の川長船れあや神とさくさる

言はゆえ二のちのさくさるさくさる船れあ

也若志れ宇下もてあはすくさるあ人のさる

さくさるあはすくさるあはすくさる

さくさるあはすく

さくさるあはすくさるあはすくさる

あはすくさるあはすく

あはすくさるあはすくさるあはすくさる

あはすくさるあはすく

あはすくさるあはすくさるあはすくさる

あはすくさるあはすくさるあはすくさる

錦観巻 還客 始覚 心 和年

錦ト云真ヲ織付名錦之人ヨリ得テ作名詩

目のまははせささげ ちやうとつて月さ

亮 ちやうとつて月さささげ ちやうとつて月さ

ちやうとつて月さささげ 河 蠶 蟬 衣 眞 紙

負 以 白氏文集十四曰紅紙白紙西上二束半

是君詩半是書 經年不展 緣身病 今白用看生

負 二 似夕ハ莫ノ字ヲ付ル 錢 表也亦作

夏夜の云夏の四月とて十題出部 定家

ちやうとつて月さささげ ちやうとつて月さ

ちやうとつて月さささげ ちやうとつて月さ

ちやうとつて月さささげ ちやうとつて月さ

けあつて月さささげ ちやうとつて月さ

ちやうとつて月さささげ ちやうとつて月さ

ちやうとつて月さささげ ちやうとつて月さ

ちやうとつて月さささげ ちやうとつて月さ

ちやうとつて月さささげ

推本 元禄十帖第二

等為美名量又二歳のまより又このままで
おもしろ

うろくやうきんしつりうりまの

元禄と夏よりせそく

我居部のうろくきんしつりうりまの

元禄と夏よりせそく

海氏のみまをうりて元久

元禄十帖 夜意の題して定家

海氏のまをうりて元久

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

元禄十帖 夜意の題して定家

け華と味と修せし連平台流とる対作りは
曆とや三年の竹葉ありき今も有氏れ名心
と流ありと葉た長けりり神堂の園のよ修りく
とと葉の流よりつらつらとてとて年あり修く
永義七年より慶安三年とと百六年の百平台
院不滅と

いすぐうくたごのらん

團碁 先好作之 雙六 自天竺之之又と並書有作し
持統天皇三年禁制

彈碁 後漢書梁冀傳云彈碁藝經彈碁兩人對局白黑各十八枚
先列碁相當更彈也碁局以石為之先凱之云云

池の極あれん今ひつげをひらき

極く極れ心の極れと極あり

川をい柳のおたつとさらく水け

仍竟之り本紀に顯宗二十天の御覧よ

子延川をい柳ありけいさびと地はらその根とせ

け等川をい柳ともある初く又之始よけい初れ下白と

たさうととととの根絶せととゆて書之

奇

かんといらく 花 村上御記應和元年閏三月十一日

藤宴舟樂奏 ガクニシカシ 醉舞人四人 ラクシニウラド 今葉 チハヒキ 醉舞 カン

石樂也舟樂 ガク 今葉 チハヒキ 醉舞 カン

異中よのどいらくき河津樂一越調。無舞河津を

道進されし後あるを能んおむあむのひんすいさ
一ころぞのらまさうくあまひゆし

橋人の此れ寺之只双調は律ハ平調也雙調ハ樂ハ
多ハ一越調とて吹越ク一越調ト則又定ト

雙調ハ甲也一越調ハ乙也雙調の樂ハ律ハ一越
ハ吹ク双調の乙とてゆへ橋人の後よそのみらぐ

りしを月とてさうらむらひ留らふよふ也
とてゆへ人のみ

橋人

橋人よのめらしめ修律田と十町作らつるをてゆり
夢んやさうやさ守ゆらんやさうや

言とて明日をらめ遠方よあきらませまわれハ明日
もこの夢んやさうやさうやさうや

櫻人ト暉舞舞ハ五人と塵ク九調しらむト留
りよハウタヒノ節之ニ似メハ女ニ留ラテ云ク九調也

さしゆり三人ハ明日ゆらん之せあふ史之とねん
甲とてさうやの明日もくさのさの節ん

る海そんはさく
生原王とてけ物語也
生王家無等倫とあるは同く生原王の思を王

孫とつる程よのあゝぬふもや至徳能^三と孫の
あゝ^{十五}皇氏^{十六}の口後^{十七}

ら後^{十八}白^{十九}あ^{二十}らう^{二十一}は^{二十二}る^{二十三}と^{二十四}同^{二十五}か^{二十六}と^{二十七}新^{二十八}た^{二十九}か^{三十}ら

可^{三十一}我^{三十二}翁^{三十三}と^{三十四}た^{三十五}の^{三十六}む^{三十七}き^{三十八}あ^{三十九}ら^{四十}ら^{四十一}同^{四十二}か^{四十三}ら^{四十四}と^{四十五}と^{四十六}と^{四十七}と^{四十八}と^{四十九}と^{五十}と

あ^{五十一}と^{五十二}む^{五十三}ら^{五十四}ら^{五十五}ら^{五十六}ら^{五十七}ら^{五十八}ら^{五十九}ら^{六十}ら^{六十一}ら^{六十二}ら^{六十三}ら^{六十四}ら^{六十五}ら^{六十六}ら^{六十七}ら^{六十八}ら^{六十九}ら^{七十}ら

と^{七十一}と^{七十二}と^{七十三}と^{七十四}と^{七十五}と^{七十六}と^{七十七}と^{七十八}と^{七十九}と^{八十}と

何^{八十一}あ^{八十二}ら^{八十三}ら^{八十四}ら^{八十五}ら^{八十六}ら^{八十七}ら^{八十八}ら^{八十九}ら^{九十}ら^{九十一}ら^{九十二}ら^{九十三}ら^{九十四}ら^{九十五}ら^{九十六}ら^{九十七}ら^{九十八}ら^{九十九}ら^{一百}ら

あ^{一百零一}と^{一百零二}と^{一百零三}と^{一百零四}と^{一百零五}と^{一百零六}と^{一百零七}と^{一百零八}と^{一百零九}と^{一百一十}と

あ^{一百一十一}と^{一百一十二}と^{一百一十三}と^{一百一十四}と^{一百一十五}と^{一百一十六}と^{一百一十七}と^{一百一十八}と^{一百一十九}と^{一百二十}と

あ^{一百二十一}と^{一百二十二}と^{一百二十三}と^{一百二十四}と^{一百二十五}と^{一百二十六}と^{一百二十七}と^{一百二十八}と^{一百二十九}と^{一百三十}と

あ^{一百三十一}と^{一百三十二}と^{一百三十三}と^{一百三十四}と^{一百三十五}と^{一百三十六}と^{一百三十七}と^{一百三十八}と^{一百三十九}と^{一百四十}と

あ^{一百四十一}と^{一百四十二}と^{一百四十三}と^{一百四十四}と^{一百四十五}と^{一百四十六}と^{一百四十七}と^{一百四十八}と^{一百四十九}と^{一百五十}と

あ^{一百五十一}と^{一百五十二}と^{一百五十三}と^{一百五十四}と^{一百五十五}と^{一百五十六}と^{一百五十七}と^{一百五十八}と^{一百五十九}と^{一百六十}と

あ^{一百六十一}と^{一百六十二}と^{一百六十三}と^{一百六十四}と^{一百六十五}と^{一百六十六}と^{一百六十七}と^{一百六十八}と^{一百六十九}と^{一百七十}と

あ^{一百七十一}と^{一百七十二}と^{一百七十三}と^{一百七十四}と^{一百七十五}と^{一百七十六}と^{一百七十七}と^{一百七十八}と^{一百七十九}と^{一百八十}と

あ^{一百八十一}と^{一百八十二}と^{一百八十三}と^{一百八十四}と^{一百八十五}と^{一百八十六}と^{一百八十七}と^{一百八十八}と^{一百八十九}と^{一百九十}と

あ^{一百九十一}と^{一百九十二}と^{一百九十三}と^{一百九十四}と^{一百九十五}と^{一百九十六}と^{一百九十七}と^{一百九十八}と^{一百九十九}と^{二百}と

あ^{二百零一}と^{二百零二}と^{二百零三}と^{二百零四}と^{二百零五}と^{二百零六}と^{二百零七}と^{二百零八}と^{二百零九}と^{二百一十}と

あ^{二百一十一}と^{二百一十二}と^{二百一十三}と^{二百一十四}と^{二百一十五}と^{二百一十六}と^{二百一十七}と^{二百一十八}と^{二百一十九}と^{二百二十}と

あ^{二百三十一}と^{二百三十二}と^{二百三十三}と^{二百三十四}と^{二百三十五}と^{二百三十六}と^{二百三十七}と^{二百三十八}と^{二百三十九}と^{二百四十}と

竹の北門ト白雲部ハ此物漸消モ阿ククニ
半梅して夏ヨク海ニ入ル人花多ク年乃終ニ
ソノハ夏ヨクハ花多ク入ル人

子月ヨリヨ 夏梅云々の秋中細言ハヤリ
秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ
秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ
出ルル人

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

秋中細言トクハ次の年ハ七月ヨリヨクハ

九重閑々々 弄くぐり 宮中も夜もあはれ 宮の書

梨のうも花のけしきありあけり 皇孫の遊りては

秋の果てにさくらさくらとて かく守りてのまはりて

ゆきゆきの女もさくらさくらとて 皇孫の遊りては

のらりんとりんとて 公界の女もさくらさくらとて

ひよひよとてさくらさくらとて 皇孫の遊りては

香山大樹緊那羅於弘前彈瑠璃琴奏八万四千

音樂迦葉尊者忘威儀而起舞 大樹緊那羅經法華

乾闥婆王奏樂直得須弥震動大海騰波迦葉起

舞 傳燈錄

大樹緊那羅經云大樹緊那羅与無量緊及無量

乾無量諸天奏四方四千淨妙樂音來至佛前誦歌

一動聲振大千須弥山王涌沒偈仰一切聲聞皆

從座起猶如舞戲天冠菩薩向迦葉言汝欲知足

頭陀身上一乃於今日猶如小兒迦葉答言非本心

也

翻譯名義集二八部篇云八部一天二龍三夜叉

四乾闥婆五阿脩羅六迦樓羅七緊那羅八摩睺

羅伽乾闥婆此云香陞此亦陵空之神不飲酒肉

唯香資陰是天主幢倒樂神在須弥南金剛窟住

什曰天樂神也天欲作樂時此神身有異相出也
後上天勅云尋香行

緊那羅文句亦名真陀羅此云疑神什曰秦言人
非人似人而頭上有角人見之言人耶非人耶因
以名之亦天伎神也小不及乾闥婆新云歌神是
諸天絲竹之神

優婆塞宮子對一々の約され似わひらるるをく會
すまひあし 七月廿六七八九日の事

御あり上御勅と奉てた名に次將子相撲あ家なまの
節として天子の御覧する事之先中六七日の事

お積と云えと万葉に相撲はともくみ言子四段と
きりありまじ上仁壽殿の宮所なる名に相撲れ人
獲鼻禪の上は將衣袴をとりて一とよお積と云て
勝負あり凡八日ひ合天宮南殿に坐席する公御年
上と大将お獲養ととりたる番きて勝れ方礼聲
あり又み丸り後宮にてお積と云てくはし
ら家神龜 四年 三年は始て流あよりお積れ人と
そのがせら家宮年 七年より重相撲と云人あり

ありてはく人づめんよまのふもけりし色
竹云 采厚は洗妍配今下を疑るるに三命
サカハツカニメウキニシニミヨミニミサキ
三ツガキ
 の目感乃道物もくくの乳はけくあめのか
そめト
 ひろくあしゆり

何カ ちよごらひらくくまふお非ありそ有衣人

おらひひりよの味 竹云 之味とく不化のく之念傳と

クシテ 味教傳之味又孝行之味もど之記嚴注より我

テ 於佛法中一知一行之味所謂念佛之味と云定と三

ガニガキ 昧より傳教大師云以諸方便樂閑靜攝心於彼得二

ラ 昧と云は之く

娘をくらの朝の香ぬくくまのあ

カラム 胸羅と

漏りづらうらん 何 史記呂后本記曰孝惠帝崩

カスレ庄ガ 太后哭泣不下多 カスレ庄ガ 論語六先進篇曰顔淵死子哭之

ハス 慟泣 ハス 慟哀過也 コクキヲ 哭泣 オミダ 涙 オミダ 涙

花ト 杜詩云驚定却拭泪

けりけりあつらりりり

何カ けりけりあつらりりり

けりけりあつらりりり

けりけりあつらりりり

竹云 けりけりあつらりりり

其破壁乃辞謝相如使从間道以壁還趙
藺名相如官之趙上秦上國名也十城之
下也押取之也時壁碎身死也也之下
和ガニタヒリケレ玉ノ名物也

ひしひのらぐらとふらとてねんころりよ

定休云今服者らよりりあてつてははる

礼記喪大記曰父母之喪居倚廬不塗寝苫枕
非喪事不言又同喪篇曰成殯而歸不敝入
居於倚廬哀親之在外寢苫枕塊哀親之在
五

月のけいりて

定休云我々の方よりり

ぬて

つてをわらぬ月の方よりりて

ゆ

秋のしん

たの

か

ろ

お

ま

は

光

海舟の漉れたけり 秋のまねまねとてあつて

よのちのまね

存衣つらきまね 人の泪れ玉の滴もあつたり 忠孝

そよかぜのまねのまね

別海にまねのまねのまね 命よとてあつて

秋のまね 秋のまね 新古今七月 荒涼

八月のまね 九月のまね

枯音のまね

何れも 厚のまね 枯音のまね

ゆきまねのまね 秋のまね

ゆきまねのまね 実枝云 枯音のまね

ゆきまねのまね 今もあつて

ゆきまねのまね

あつたれ 松のまねのまね 中老

まねのまね 伊勢のまね 松のまね

あつたれ 松のまね

奥のまねのまね 松のまね

ゆきまねのまね

ゆきまねのまね 松のまね

ふしとけいふふふふふふふふ

らるるものゝさるるものむごゆるん

草平 他人のほしてきつらまれとこのむ法なくお茶教らう

きうん陰とちのき推まぐりし

花 うつら身口結業らうてま宮人きひてつら

優は女墓つとあふこの推まぐりあふとく廟たあかね

きうんえよつとてゆるくとて海はのせう

花 宮清は神あるむつらうりのきうんはあふまふまふつら

らものひさふ けいふ 藤ふらふ紫藤むらや。本書ほんの精進しやうじん

花 神境かみのきうんはあふまふまふのひさふのひさふのひさふ

昨けつ祭福肉まつふくにくやにボロートヨム字じ也

あふりて けいふのけい

花 きうんはあふまふまふのひさふのひさふのひさふ

あふりて けいふ けいふはあふまふまふ

白き部しろの交ま袖そで入い清きよけりし時

心こころ福ふくもあふらにあふらて同どうのけいもあふりてけい

つてまふ けいふ 七年の長人あふらり白文しろぶんへの也なり奇きよ

あふりて けいふ あふりてあふらにあふらにあふらにあふらに

けいふはあふらにあふらにあふらにあふらにあふらに

あふりてあふらにあふらに

ひびあびらなる

延喜式源柱ありすてなり

手とありなる手の手なり

室枝云多とらる手延喜式より手神祇令

第六凡天自即位手其大幣者三月之日令修理

訖手金水桶金線柱奉伊勢神宮

女子手なるなりを手けむ手なり

我が海とむぬらん

伊勢集手七条后崩叶手上人ありて手の

とらるけらるる手今より手なり

今ゆら手なり手今より手なり

孫を手ありて手なり

人

もうあひて手なり

伊勢と手なり

大御言手新撰手伊勢手なり

本朝文手輝手曰手彈手者手同手稱手

手藤相公手兼手辨官手故手稱手其手女手

也手か手づ手河手なり手母手姨手父手伯手

流手なり

物手なり手の手なり

母之集れ初く女を籠部よの物ありさるめさる

多分海地ありは別強の心もくもおもひあつりぬ

わけすは小せれわうと結ひあつりぬおもひあつりぬ

仍其云くぬ書の糸を角伝は結ばれなればさうあり

月一石とい角伝の結りる角一より合人さみ伝

る糸の奇れらうまうらびあひるんを也

催馬楽 呂 角伝

角伝やまじくはらざりてまじくまじりて移れば

ゆらびあひまうらりくゆらり合まうらりく

尋上ハ八尺也まじくは身ノ節也まじりてト糸ノ下

ル中人ノ遠テ霞タルヨセラリゆらりあひの寄り合

あつり初めをさうらりけよ 糸よまじりてさうらり

行系とてあつりてあつりてあつりてあつりてあつりて

み山ざれはらんざらん

ゆらりまじりてあつりてあつりてあつりてあつりて

何のちのもつげあつりてあつりてあつりてあつりて

何のちのあつりてあつりてあつりてあつりてあつりて

松の葉とてあつりてあつりてあつりてあつりて

花 葉の葉もあつりてあつりてあつりてあつりて
金峯山縁記 役行者着藤之皮衣松葉為食 吸た

汗助保身命三十餘年

汗主荒也食私穀不飢壽百七十餘年

たんじぶくも押ゆり 二條三ノのりま 辨危が忍養之前了 葦志志

初よんぐん九のいゝあやうに物つゝげちる

いふおびりゝとたのりうゝあゝとあゝ

吞てとり

なぶてまはらひかぬとやうん 大忍の初

よ葦志初なまふりぬるおめあゝとあゝ

おつゝとりのいゝらゝあゝとあゝ

よめくに定るは世の物づらゝとあゝ

みゆりゝんれゝ後のうゝとあゝ

あんととて今押入ぬゝとあゝ

らあゝとあゝとあゝ

もうぐらんゝあゝとあゝ

すうちう新之

水れまはらゝとあゝ 朗詠下ニ王

昭君題 島凡吹新秋心緒 瀧水流流夜渡

仰云 昭君ハ漢ノ元帝ノ時ニ單于來テ宮女ヲ乞フキ

昭君が胡國へ下テ都ヲ思フ渡レ胡ヲ邊凡ト

云クリ 瀧 には 顔 人 名 満

るがのついでゆきも旅れありのあるなり

晨雞再鳴残月没 征馬連嘶行人出 白氏文集

ひくをれなき海より羽風

村々のまきりけらる今更なるはあしをさるあつた

あつたのまねわゆるさる

ゆるさるぬ曉おれた朝のなるさる海より物よがさる

山嵐れなきさるさるあつたのあつたあつたあつたあつた

實校を知らしとる風の風も歌のまのさる

けののまのまのあつたあつたあつたあつたあつたあつた

ゆのあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

げり又鶴のさるさるあつたあつたあつたあつたあつたあつた

第のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

一鳥不啼山更幽 くらさるの神く

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

かきまはるひの油にるくはるもゆかしのの葉よらふ
る井人かきてあつひを念ひ合はれ

橋姫養よとの井人の流と葉のさびるらん
かきまはるひの油にるくはるもゆかしのの葉よらふ

さくしん中をのらひ合はれ

ひらびらのるくはるもゆかしのの葉よらふ

遠くはるひの油にるくはるもゆかしのの葉よらふ
遠くはるひの油にるくはるもゆかしのの葉よらふ
れん

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

無

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

あまのついでにるくはるもゆかしのの葉よらふ

おの約は年つりつたしはよきものかづへにあらつ
くらふちりてまじりけりまゝのまゝなりけり
け約どひてまじりておのく上層のまじり
らぬ

今つておのちりておの
ま

ま
あひおの
あま

あま

百集第二大侍安麻呂甥大納言巨勢人女シラノメノ

ま

あま

あま

あま
あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

あま

うきく〜〜〜あま〜のあひま〜

只の中れきり〜と〜い〜あ〜く

遠壁タカシキ暗菴アノミヤ世ヨ無限ムゲン思オモヒ戀コイ集ツグ寒サムイ庭ニワ自ミヅ味アジ能ノ辭コトバ

礼記レキキ月令ツキツキ曰イハレ蟋蟀シラソウ居ス壁カミ

大忍オホニノの壁カミ乃ナラりシの序ヒキ凡ソレのレれハゆるクとシ也ナリ

よき〜〜〜

身ミもモはハけケつツらラるルさサらラらラらラ

丹後タニノ郡ノ之ノ名ノ一ヒトノ名ノ謝シヤの海ノ子ノ才ノとトあアけケつツらラらラらラ

秋アキのノきキ〜〜〜あアゆユ〜〜

後ノチ〜〜〜秋アキ〜〜〜

何ナニ〜〜〜深フカ〜〜〜

不フ安ヤスかカ出デ推オシ〜〜〜

姫ヒメ君キミのノ葉ハ〜〜〜

ひヒのノ葉ハ〜〜〜

白シロ〜〜〜

玉タマ〜〜〜

〜〜〜

ひヒ〜〜〜

山ヤマ〜〜〜

〜〜〜

なまぐーしけすらとるるめらよ申君もあづからり
ていめら

字の紙之版中君へうらひの紙書でん所一のあ
いさあ

あはれとてあこゆりあすしはらるる
し
よ中た志の物昔はあひあしあふら

あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる

あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる

あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる

あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる

あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる

あはれとてあこゆりあすしはらるる
あはれとてあこゆりあすしはらるる

よゝ新ニ〜所ニ可レ代スけル〜の見ケ備タ

煩ナ惱ト滑レ乃クどろろノ〜家ノあさノぼらノいノ回ヲとみテ

〜事ノ〜具ノ是ノたノろノ笑トはノはノけノ物ヲ

始ニ好シ〜とニはノ〜飛ト〜

〜ぬ海ノ〜きノ〜いノ〜とノ〜
并海ノ撫レ離リ有ス

源ノ沙ニ

〜たノ〜海ノ〜とノ〜

〜らノ〜とノ〜の

〜とノ〜の月ノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜

例ノの明ノ〜とノ〜はノ〜とノ〜はノ〜とノ〜はノ〜とノ〜
け春レ始トハ

茗ノ子ノ守ニ

宮ノ敷ノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜

は時ノ〜とノ〜例ノ〜とノ〜

〜とノ〜我ノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜

〜園ノはノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜
後ヲ

〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜

〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜

〜とノ〜の〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜
董ノ子ノ獨レ言ハふト〜とノ〜とノ〜とノ〜

山ノ崎ノはノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜
人ノハ

〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜とノ〜

仲之 中まの所迹チリコトに〜三好母女官のまゝのみある

くことや 其身正則 不容而行タカシキミナラハ 容レズルヲ行フ

まごもわくも〜きさるわ〜海とさひわ〜

普ホトの書よまき〜の 歎なげして 佛ほとけの命いのちはけ

〜あやまら〜と〜の 戒けい

とせり〜いふ動うご好この〜いふと〜いふと〜いふと〜

歎なげして 愛あい者ものの念ねんと〜いふと〜

我われ〜いふと〜いふと〜いふと〜

〜いふと〜いふと〜いふと〜

〜いふと〜いふと〜

仲文集 中宮内侍のまげ 宣のたまひと 尼あまの

〜いふと〜いふと〜いふと〜

〜いふと〜いふと〜

〜いふと〜いふと〜いふと〜

初はつの白しろ波なみあられずの 河かの 舟ふねの ぬり

〜いふと〜いふと〜いふと〜

〜いふと〜いふと〜いふと〜

登のぼり法師ほふし始はじ造ぞう宇治橋うぢはし 今案道いまあんどう和尙わじやう月久つきひさ歎なげ

〜いふと〜いふと〜いふと〜

中なの 人ひと物ものの けしき 船ふねの 河かの 舟ふねの ぬり

花鳥の^{しづか}しづかに 枝葉の^ももを 枝葉の^ももを 枝葉の^ももを

ふれはるるるるる 女の^{しづか}しづかに 女の^{しづか}しづかに 女の^{しづか}しづかに

家の^{しづか}しづかに 大和の^{しづか}しづかに 大和の^{しづか}しづかに 大和の^{しづか}しづかに

よふやうに

物の^{しづか}しづかに 物の^{しづか}しづかに 物の^{しづか}しづかに 物の^{しづか}しづかに

たの^{しづか}しづかに たの^{しづか}しづかに たの^{しづか}しづかに たの^{しづか}しづかに

あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに

〜

あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに

げふ^{しづか}しづかに げふ^{しづか}しづかに げふ^{しづか}しづかに げふ^{しづか}しづかに

つけ^{しづか}しづかに つけ^{しづか}しづかに つけ^{しづか}しづかに つけ^{しづか}しづかに

果^{しづか}しづかに 果^{しづか}しづかに 果^{しづか}しづかに 果^{しづか}しづかに

〜

かぶ^{しづか}しづかに かぶ^{しづか}しづかに かぶ^{しづか}しづかに かぶ^{しづか}しづかに

〜

おれ^{しづか}しづかに おれ^{しづか}しづかに おれ^{しづか}しづかに おれ^{しづか}しづかに

花後撰

あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに あつた^{しづか}しづかに

宗業と幕くらふめのあかりし綿一と云ふなり

もと例ぐーて孝二氏白河院義保年中大井川

の行きてもあやむる宗業にしてうまぬ

七つくりのほりのかかぬ宗業の光と云ふを海舟とあざむら

宗業と橋よりいせざむのらうして七つをさむら

孝二 孝二のて一東姓より孝二の我があむうてさむら

あひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

細谷のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

孝二のあひあひれ海のらうして

白雲の心

物名はなごころしんじの心さしめく物なごころしん
ひかりのきふ事事平れぬ憐愍の心さしめく
わろがらにしんじとかなまの心さしめく
してこの心さしめく

世の中はなごころしんじの心さしめく物なごころしん
世の中はなごころしんじの心さしめく物なごころしん
世の中はなごころしんじの心さしめく物なごころしん
世の中はなごころしんじの心さしめく物なごころしん
世の中はなごころしんじの心さしめく物なごころしん

物なごころしんじの心さしめく物なごころしん
人のあまありたる人の心をさしめく物なごころしん
十洲記云々聚窟洲在西海中由來地上有木樹
与楓木相似葉葉香聞數百里名為及魂樹
死屍在地聞其仍活
白氏文集曰九華帳深夜悄々及魂香及人魂木
人之魂在何許香煙引到焚香所此の心さしめく人
うせてのら漢武帝甘泉殿の裡に彼心とあして

おどろいて是業体合せとありて金銀も積りて
香の煙れ申す夫人の御心してしる也 情 憂也
わじとてめ世の

あつちぬ我力とて言ぬよの今より人をもあつちぬ
たが乃かしと命よる 弄中の念はくもあつちぬ
あつちぬ我力とて言ぬよの今より人をもあつちぬ
わじとてめ世の

わじとてめ世の
わじとてめ世の

わじとてめ世の
わじとてめ世の

わじとてめ世の
わじとてめ世の

わじとてめ世の
わじとてめ世の

わじとてめ世の
わじとてめ世の

わじとてめ世の
わじとてめ世の

人のまげまのり

あかきこころぬぶのきほんばつめとあまのい

あまうしよのふまうひて

花 夜居修して夜居

てのおすすし

あまうしのき佛さんけうまうせ

阿彌陀の

号ちううへー

常不輕とあんつせつる

法華經不輕品云

我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等皆行菩薩

道當得作佛釋尊因位は常不輕菩薩の時

け二千四千字の偈と唱て回衆と礼拝のうらまをさ下

切衆生れ佛性あるあまがじつひくつせよ

礼拝のもしぬけくさうよ約の上略之確れよ

祓らうくよ礼おとたててうけ

あまうしよまうけいざんはな

三有とらる本有中有生有くまうまうらうは

あまうしよ中のうらまをさくあまのうらまをさく

あまうしよ

まうのすまうつこあまうしよ

廻向のまうらう

願以此功德善及於一切我等与衆生皆俱成

道

おのゆるけのよき打倦て嘆き出さるわけは
實核云せれきあふはのこころとて
多の都を以て石柱のこゑは風一とあり
縁のよし毛待因難篇は后妃の徳といふ
して腫鳩れるとてつれなく

かみづきいれありさゆいとあまきうてしつみ
尺取ありん 葉花物語より治政よくて具
年親王の舞よりけし親王とせ給ひて
ふあ流のわらふとありてもなりけり
わ物の氣煩ありて絶へ給ひたりあり
具乎親王より里流ひてけせよまてて
てまかり給ふよりあり

大やけあもりさうめしつれあり
葉類書敬也 花 服文 請服若干箇月
牒依其事一取請如件以牒 治病人者治病

年月日 官位姓名

富後云葉中袖を服文とありて家より居給て
昔い何日とて服文と書て奏せしは
る

そののりり 豊明節會ハ十二月中辰日

豊明節會ハ十二月中辰日

今年れ猶と積ふきせぬひて今ろろしゆり
 后下めと行しゆは萬念のけりる華相傳は妻
 かたかり日新もかぬ真つよとくしはあもあ
 高光集よゆいさせぬひての年新書全れは
 口しもえまうで内傳のりよ

家もれ家の日新しり今ろのり新とあぞ出
 今業新掌會日中 豊明節會日中 小志とさる
 人口蔭のうととよ物と冠はかろし日蔭草
 といさうの毒れうよ今世系と結てかろは日蔭草
 かどろや日蔭とて髪とす此日中記才一は
 あり是よりよかこまろく

多しゆのり
 今業新掌會日中 豊明節會日中 小志とさる
 人口蔭のうととよ物と冠はかろし日蔭草
 といさうの毒れうよ今世系と結てかろは日蔭草
 かどろや日蔭とて髪とす此日中記才一は
 あり是よりよかこまろく
 今業新掌會日中 豊明節會日中 小志とさる
 人口蔭のうととよ物と冠はかろし日蔭草
 といさうの毒れうよ今世系と結てかろは日蔭草
 かどろや日蔭とて髪とす此日中記才一は
 あり是よりよかこまろく

宮はなほ〜つらりひほりもみ海〜て世の人
すまふ〜ふりあるちららの月

ほのゆを枕に伏し冷物ちららの月おとわりみこり
まふらちの物ほりあり

髪をよまればあげて又ほつひのちれかひのくちと

そび〜
遺愛寺鐘歌枕聴香燭寒雪撥簾

看朗詠山家
唐高宗ノ太子七歳ノ時薨ゼリ

像ヲ作テ寺ニ置タリ仍遺愛寺ト号ス此寺香燭
ノ下アリ

くわも言ぬとくすらうとやて

宮はなほの寝れお毎よまふも言ぬ〜
実極を夜よりうて〜
言ぬ〜とふんあ〜と不審抄を禁天か治と吟〜
て今も言ぬといふ夕のや〜
と奏あげては流を吟〜
の〜と吟〜
アそつれくと月の体送りほよ言と歩ひつら
ふ〜ひのるれ寝の〜
ぬ〜
〜とあり

やうなる家傳とてん 呪まがふ

阿含經又涅槃經に説く釋尊の目位に雪山童子

とあり一時千劫夜叉理法を承け少く諸行無常是

生滅法とて思ふ此二百の飢てり少く飢てり思ふ

アアアア童子行とて食むんと同く血肉を食むんと

り我が身とてアアアアアアアアアアアアアアアア

生滅々已寂滅為樂と唱へり童子石壁にまけ

谷よめり鬼の面へおほくはり蓮華とて言

みとけのせり鬼に帝釋天と

雪山童子に此法の為薰るをゆゆ人なりとて

あまはとてあや。 冥後云とてけけけけけけけ

ふとあらんとはあまてあまけあまあま

あま

口からいへるはあまてあまてあまてあまてあま

あまてあまてあまてあまてあまてあまてあま

あまてあまてあまてあまてあまてあまてあま

あまてあまてあまてあまてあまてあまてあま

あまてあまてあまてあまてあまてあまてあま

